



著者が本誌編集委員会に参画したのは2024年6月からなので、本誌編集委員としての経験はまだ浅い。それ以前は一読者であり、また投稿者の一人であった。これまで幾度か本誌に原稿を投稿した際、査読がきわめて厳しく、掲載に至るまでのあまりにも高い壁に戸惑い、正直に言えば時に気持ちが萎えたこともあった。実際、本誌の査読は、いわゆるトップジャーナルを除けば、多くの英文誌と比較してもなお厳格であると感じた。

しかしながら、実際に編集委員会に加わり、査読の過程に関与するようになって、その理由は明確となった。月に一度開催される多領域の専門家で構成される編集委員会では多くの議題が話し合われるが、その中心的議題は投稿論文の査読結果の検討である。主査が自らの評価に加え、もう一名の査読者である副査の意見を提示し、それをもとに委員全体で議論を行う。主査は編集委員が務めるが、原則として副査は外部の有識者に依頼する。この過程には相応の時間を要し、毎回2時間に及ぶことも少なくない。多くの英文誌では、査読の判断は査読者と編集責任者に委ねられ、委員会全体での検討は行われなことが一般的であることを考えると、本誌のこの運営は特異である。

しかし、この「特異さ」は単に非効率を意味するものではない。むしろ、異なる視点をもつ複数の専門家が1つの原稿に向き合い、論理の整合性、方法の妥当性、臨床的含意、そして言語表現に至るまでを多層的に吟味する過程そのものが、本誌の価値を形づくっている。査読とは単なる選別の手続きではなく、知を磨き上げる過程であり、その意味において本誌の査読は精神医学における知の共同的形成の場であるといえる。

精神医学において、症候学的記述、心理的意味づけ、生物学的基盤の解明といった異なる水準の知はいずれも不可欠であるが、それらは単独では十分ではなく、相互に照らし合わせながら統合されることによって、はじめて臨床的

に意味をもつ理解へと到達する。本誌における査読過程は、まさにこの統合の営みを具体化する試みでもある。個々の論文が提示する知見を、より妥当で、より伝達可能なかたちへと練り上げていく過程に立ち会うなかで、著者はその意義を改めて実感し、その営みの一部に関与していることに確かな手応えを感じている。

本年6月に開催される第122回日本精神神経学会学術総会においては、編集委員会企画シンポジウム「精神神経学雑誌投稿奨励賞の現状と課題」を企画した。本賞は、優れた研究発表を論文化へと導き、知として定着させることを目的として創設されたものであるが、現状では受賞後の投稿率が必ずしも高いとはいえず、その意図が十分に機能しているとは言い難い側面もある。若手研究者が論文化の過程で直面する困難や、和文誌と英文誌の位置づけに関する認識の揺らぎなど、その背景には複合的な課題が存在している。本シンポジウムでは、それらの課題を可視化し、受賞から論文化、さらには国際発信へと至るプロセスをいかに支援するかについて議論することをめざしている。

精神医学における知は、単に新規性の高い結果を提示することのみによって成立するものではない。それをいかに言語化し、共有し、蓄積していくかという過程を通じて、はじめて学問としての厚みを帯びる。とりわけ日本語による学術誌は、臨床に根ざした思考や実践知を精緻に表現する媒体として、固有の役割を担っている。本誌において重ねられてきた厳格な査読と丁寧な編集の営みは、そのような知の形成を支える基盤である。世界でも有数の歴史を有する精神医学専門誌として培われてきたこの伝統は、単なる形式ではなく、精神医学の知をいかに生成し、いかに次世代へと継承していくかという問いに対する1つの答えでもある。この営みが今後も守られ、さらに発展していくことを強く願う。

國井泰人